

# 市民団体の世代交代 それぞれの選択と決断

超高齢化社会に入りつつある日本社会。市民団体もまた、例外ではない。4年前の491号では、「長年活動してきたボランティアが認知症に」をテーマに高齢化問題を取り上げたが、今回は、リーダーや中心メンバーの高齢化に伴う「世代交代」に焦点を当てた。今まさに直面している団体もあるかもしれないし、遠からず起きる問題として捉えている団体も少なくないだろう。

世代交代のあり方を一律に論じるのは難しい。団体の状況により、選ぶ道も方法もさまざまだからだ。本特集では、それらの選択について、事例を中心に紹介する。自らの団体の世代交代をどう考えるのか、また支援組織は支援対象団体の世代交代をどうサポートするのか、本特集を通して考えてほしい。

【特集チーム】

稲田 千紘、梅田 純平、増田 宏幸、  
棕木 美緒、村岡 正司、百瀬 真友美

- ① **《特集》 市民団体の世代交代 それぞれの選択と決断**
- ⑩ **《うおろ君の気にな〜るゼミナール》 「ワンオペ育児」って？**
- ⑪ **《ウォロ'sトピック》 日本に寄付文化は根づいたか 広がってきた、寄付のバリエーション**
- ⑫ **《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》 Aは長く、Pは短い 中村 順子 (認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸 理事長)**
- ⑬ **《九州北部豪雨災害 朝倉発〜現地から伝える「被災地の今」》 学生宿泊拠点「うきはベース」のとりくみ 藤澤 健児 (NPO法人ANGELWINGS 理事長)**
- ⑭ **《V時評》 1.“大人”はどう応える？ 総選挙で見た若者の意識 2. 障害者とボランティア・地域住民との接点を見直す〜大規模災害時を視野に入れて**
- ⑮ **《続・マーケティングは愛だ ドクター長浜と悩めるNPO》 中間支援組織の役割を見直す！ 長浜 洋二 (株式会社PubliCo 代表取締役 CEO)**
- ⑯ **《現場は語る ~コーディネートの現場から》 「天神祭ごみゼロ大作戦」 延べ800人を超えるボランティアのコーディネーション 岡見 厚志 (天神祭ごみゼロ大作戦実行委員会 事務局長)**
- ⑰ **《市民活動の暦 (こよみ) ~ 12月、1月にあったこと》 50年前……「水俣病対策市民会議」結成**
- ⑱ **《U35》 三木 俊和さん (株式会社おひやくしよ Meets 代表取締役)**
- ⑲ **《この人に》 島袋 淑子さん (ひめゆり平和祈念資料館 館長) 尾鍋 拓美さん (ひめゆり平和祈念資料館 学芸課説明員)**
- ⑳ **《アゴラ/シネマ/ライブラリー》 「Cafeここの」 / 『恋とボルバキア』 / 書籍紹介**
- ㉑ **《傍聴カフェ〜裁判からみえる社会》 ケースNo4 「広汎性発達障害の放火」**

## 70th 赤い羽根共同募金

まちを住み良くするしくみ

まかせまで70周年

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……

-  地域で、子育てのお手伝いをしたり、悩んでいるお母さん、お父さんの相談にのる活動や、
-  障がいのある人が、まちで幸せに暮らせるお手伝いをする活動や、
-  地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者に、栄養の整った食事を届ける活動や、
-  地域に住むみんなが「安心・安全」に暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。 [www.akaihane-osaka.or.jp/](http://www.akaihane-osaka.or.jp/) 募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

- 共同募金会では、今年の重要配分テーマを「障がい者（児）の福祉の増進」とし、障がい者（児）を支援する事業に対して積極的に助成いたします。また、従来どおり、社会的課題を解決するための事業や社会福祉制度の「はざま」となる事業、先駆的・開拓的な事業など幅広い民間社会福祉事業、地域に根ざしたさまざまな福祉活動の支援を行ってまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人々を助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



市民団体の世代交代  
事例 2  
特定非営利活動法人  
フェリスモンテ  
万全のサポート体制で  
次世代に引き継ぐ



フェリスモンテ 山王丸由紀子さん(左、前理事  
長。2017年5月退任)と隅田耕史さん

**関わり始めてわずか半年で  
事務局長の声がかかる**  
高齢者をはじめ、誰もが地域で「お  
たつしや」に暮らし続ける社会を目指

1999年から活動を始めた特定  
非営利活動法人フェリスモンテ。現在  
も地域サロンや助け合い活動、介護保  
険事業などを大阪市旭区と生野区で展  
開している。  
フェリスモンテの事務局長、隅田耕史  
さんは現在36歳。事務局長に就任した  
のは26歳の時だ。ボランティアとして関  
わり始めてわずか半年、正職員として  
採用されてすぐのことだった。それまで  
社会人経験も、NPOに関わった経験  
もほとんどなかった。にもかかわらず、  
当時理事長だった山王丸由紀子さんから  
「事務局長頼むで」と突然言われたと  
いう。やはり突然退任した前事務局長  
が、山王丸さんに「後継者には隅田さん  
しかない」と言ったからだろうが、

当時の隅田さんは知る由もなかった。  
そもそも、隅田さんがフェリスモンテ  
に関わり始めたのは、当時大阪に存在  
した「NPOコース」の職業訓練で、  
ある60歳代男性と出会ったのがきっかけ  
だった。その社会人経験豊富な男性  
と若い隅田さん2人が組んで、NPOを  
経営と活動の両面で支えたいと申し入  
れたのがフェリスモンテだった。2人は  
ボランティアとして、当時新設する予定  
だった地域出前サロン事業すべてを任せ  
られた。その中で自ら助成金を申請し、  
人件費を確保し、入職した。そして間  
もなく事務局長に誘われたのだ。この  
スピードには混乱したが、「何事も経  
験、やってみたらいい」と60歳代男性か  
ら背中を押されたこともあり、「数年働

合わせ業務などを担当し、新事務局長  
の村上さんをバックアップした。隊長は  
引退をとりやめてもう1年続け、翌14  
年の総会で、やはり女性をといたことも  
あり一緒に活動していた村上さんの妻  
なおみさんが推され、3代目の隊長に就  
任。団体運営は、現役世代が事務局長  
になったことで徐々に変化し、隊員一人  
一人が、運営に関わる何らかの役割を  
担うようになった。

**世代交代する意味を自問**  
世代交代することは、今までのやり  
方が変えられる・否定されることでもあ  
り、バトンを渡す側にとっては、ある意  
味苦しく覚悟がある。それでも同団体  
の世代交代がうまくいったのは、団体  
の活動意義を突き詰めて議論をした経  
験があったからだ。村上さんは話す。  
設立から5年ほどたったとき、箕面

の山からごみが減り、市民活動とし  
て、ミッションが達成されても活動を  
続けるのか、もし続けるとすれば目的  
を変えるのか、長い時間をかけてじつ  
くりと話し合われた時期があった。そ  
の結果、これまでの外部とのつながり  
を大切にしながら、美化を維持する活  
動はずっと継続する必要があると団体  
内でコンセンサスを形成することがで  
きた。同時に、山を美しく維持し、山

の美しさを子どもたちにも伝えていく  
というミッションは、いつまでも自分  
たちだけで続けていくのではなく、次  
世代へと引き継いでいき、長期的に達  
成していくものだという認識が固まっ  
たのだ。  
事務局長就任から4年、村上さんも  
活動を持続させるための組織づくりを  
心掛けている。

編集委員 稲田千紘

市民団体の世代交代  
事例 1  
箕面の山パトロール隊  
“やってみなはれ”  
若手が活躍しやすい  
風土から生まれたもの



提供=箕面の山パトロール隊

箕面の山パトロール隊  
〒562-0006 大阪府箕面市温泉町1-1 瀧道事務所  
TEL:070-5040-9734  
2004年8月結成 ボランティア48人  
年間収入120万円(2016年度)

**幅広い世代によ  
る環境保全活動**

箕面の山パトロール  
隊は2004年8月に  
結成された。「箕面の山  
を美しくしたい」「箕面  
の山の美しさを子ども  
たちに伝えていきたい」  
との思いから、大阪府の  
北郊にあるこのエリアの  
素晴らしい次世代に



箕面の山パトロール隊 村上竜太さん

伝え、一人でも多くのファンを作る活動  
を行っている。箕面の山の美化・不法投  
棄対策を目的とした山のパトロール(ク  
リーンハイキング)と、年に一度の「箕  
面の山大掃除大作戦」の活動を軸に据  
えており、加えて、「美活クリーンハイキ

**やりたいたいことがあれば、  
やってみなはれ」の文化**

村上さんは団体立ち上げ時のメン  
バーではなく、アウトドアショップでク  
リーンハイキングのチラシをみて参加し  
たことをきっかけに、07年に入会した。  
当時を振り返ってこう語る。「もとも  
と前事務局長の頃から、若い人の意見  
を取り入れよう、「やりたいたいことがあ  
れば、やってみなはれ」という風土があ  
りました。新しく加入したばかりのメン  
バーでも意見を言いやすい雰囲気、村

上さんも加入当初、団体のホームペ  
ージのリニューアルを提案したところ、そ  
の仕事を任せられることになり、幅広い  
年代の仲間と行う活動をより面白く感  
じたという。社会人の村上さんは、仕  
事の都合により箕面から離れたところ  
に住んでいた時期もあったが、ホーム  
ページ担当など遠方でも可能な活動を  
続けた。  
そして13年に再び箕面に戻ってきた  
とき、同団体の代表である「隊長」  
が、活動は続けるけれども、そろそろ  
役職は別の人に譲りたいと引退を表明  
する。同団体では、外部での挨拶など  
表に出る仕事を「隊長」が、渉外や内  
部運営の仕事は「事務局長」が行って  
いる。前隊長は2代目で、地域のラジオ  
のパーソナリティでもあった女性隊員が  
務めていた。彼女は、3代目として村上  
さんに声をかけた。しかし、表に出る仕  
事よりも地域の行政・団体などのネッ  
トワークを活用して活動を運営する事  
務局長の機能が、団体の活動継続の肝だ  
と感じていた村上さんは、運営の要の事  
務局長を引き継ぎたいと希望した。す  
ると、「それならば、やってみなはれ」と、  
隊設立時から任じていた前事務局長  
は渉外担当・顧問の役職に就き、平  
日に行われることの多い行政との打ち

うお3君の  
気にな〜る  
ゼミナール



まんが■ラッキー植松



ワンオペ育児とは、一人で育児をこなすことを意味する。ワンオペはワンオペレーションの略で、飲食チェーン店などの「一人勤務」を指す言葉が語源。内的な要因としては、配偶者の一方が家事や育児を積極的になさったり、単身赴任によって一人でせざるをえなくなったり、離婚や死別で一人親になってしまったりする状況が挙げられる。外的な要因としては、勤務先の子育てに対する理解不足のために、育児が取りづらかったり、取れても昇進や昇給に影響したり、従来のポストや業務に戻って働き続けられない、といったことがある。

ワンオペ育児は女性が担い手になることが多い。イクメンという言葉があるが、男性は遊びの部分で子どもと関わっても、オムツ替えや食事などの面倒をみることは少ないのが実態という指摘がある。中には残業がないのに帰宅せず育児や家事負担を回避する夫もいるという。

ワンオペ育児の身体的、精神的負担の大きさが、呼称が付いたことにより顕在化したと言える。子どもが生まれるまで仲が良かった夫婦に、生まれた途端に溝ができる「産後クライシス」という言葉もある。

編集委員 山中大輔

ウォロ・バインダー、いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を  
挟み込めるバインダーです。  
(ウォロ1冊500円+送料250円)  
お問い合わせはウォロ編集部/voilo@osakavol.orgまで

ウォロ's  
トピック  
Volo's Topic

日本に寄付文化は根づいたか  
広がってきた、  
寄付のバリエーション

編集委員 百瀬 真友美



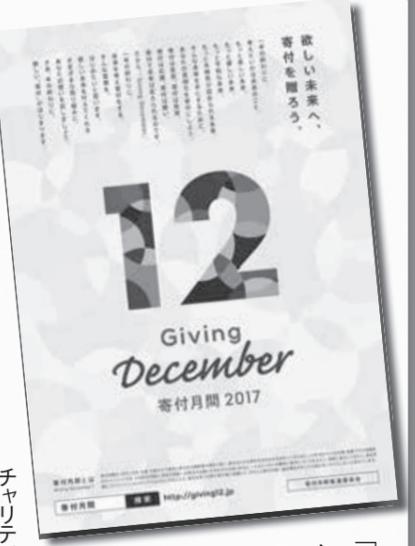
**恒例！  
歳末たすけあい運動**

毎年12月に行われる赤い羽根共同募金の「歳末たすけあい運動」の起源は、明治時代の募金活動にさかのぼる。戦争激化で中止されたが、戦後、民生委員・児童委員協議会が主催する運動として、地域住民、ボランティア、地域関連の諸団体などが協力して「地域歳末たすけあい運動」を推進。他に、NHKと共催で行われる「NHK歳末たすけあい」も12月の恒例活動になっている。NHKは、1983年から、日本赤十字社と共催で「海外たすけあい」も行っている。NHK歳末たすけあい募金は、ネットからのクレジットカード寄付も可能だ。

寄付月間2017

2017年の今年で3回目となる「寄付月間」。寄付月間推進委員会(小宮山弘委員長)が運営する民間主導のキャンペーンで、委員会はNPO、企業、行政、国際機関などで構成されている。今年の賛同団体は504団体。公式認定企画は127本で、昨年の賛同団体397団体・公式認定企画71本を大きく上回っている。

公式認定企画の中には、食会の機会が増える12月ならではのものもある。市民活動推進機関などが地域の飲食店と協力し、店舗で特



定メニューを注文すると売り上げの一部が市民団体に寄付される「カナイチャリティー」ともいわれる取り組みがあるが、認定企画にも「センドイほろ酔い寄付キャンペーン」「とっとりカナイチャリティー」などがある。また、グルメアプリ

「テーブルクロス」のキャンペーン「1万人サンタ計画」は、飲食店予約を寄付する。寄付を学んだり選んだりするだけでなく、団体や地域で取り組む寄付促進を考えるのにも役立つ。

チャリティーラン、チャリティコンサート、古本寄付、寄付付きライセンスなど、さまざまな公式認定企画が寄付月間2017サイトに掲載されている。寄付を学んだり選んだりするだけでなく、団体や地域で取り組む寄付促進を考えるのにも役立つ。

他にも、寄付をテーマにした講座やワークショップ、映画上映、

寄付先NPO一覧

「センドイほろ酔い」

2017.12.1-12.16

**センドイほろ酔い寄付キャンペーン**

社の伝言板ゆるるとせんだい・みやぎNPOセンターが構成する実行委員会が、地域の飲食店と協力して実施。キャンペーン期間中に仙台市内の参加店舗で「ほろ酔い寄付セット」を注文すると、1オーダーにつき50円が市民団体に寄付される。寄付先は、宮城県内の5団体から寄付者が選ぶ。



**1万人サンタ計画**

社会貢献ができるグルメアプリ「テーブルクロス」は、ユーザーが飲食店を予約すると、途上国の子どもの給食費が寄付されるアプリ。飲食店は予約が入った人数に応じてアプリの運営会社テーブルクロス社に広告費を支払い、同社がその中から給食費を寄付する。「1万人サンタ計画」は、このアプリの利用を促進するキャンペーンで、11月からスタートしている。11月15日に協力者が大阪で開催したパーティーには約100人が参加し、同数分の給食費が寄付された(写真提供=テーブルクロス、ラグナヴェール大阪にて開催)。

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

なんて不思議なタイトルだろう。ボルバキア。思わずネットで調べた。「宿主を性転換させる共生バクテリアの一種」だといふ。その存在に驚いたが、もしかしたら自然界では、それほど不思議な事ではないのかもしれない。この映画の登場人物は、いわゆるLGBTと呼ばれる人たちだ。



今月の作品 「恋とボルバキア」

12月9日よりポレポレ東中野はか全国順次ロードショー 公式HP http://koi-wol.com/ 監督・撮影・編集・小野さやか プロデューサー・橋本佳子 / 熊田辰男 / 森山智豆 製作・DOCUMENTARY JAPAN / LADAK / Blue Berry Bird 配給・東風 2017年 / 94分 / 日本 / ドキュメンタリー

なう。ボルバキア。思わずネットで調べた。「宿主を性転換させる共生バクテリアの一種」だといふ。その存在に驚いたが、もしかしたら自然界では、それほど不思議な事ではないのかもしれない。この映画の登場人物は、いわゆるLGBTと呼ばれる人たちだ。

人とは誰もが、恋愛に悩んだり、これからの人生をどう生きるかと迷い、幸せになりたいともかく。ここに登場する彼女、彼らも同じだ。ヒリヒリする痛みを抱えながら自分を探している。LGBTという言葉がマスコミで一般的に使われ、カミングアウトしたタレントが活躍し、偏見の壁が低くなったと感じていたが、何かのきっかけがあると、賛否両論が飛び交い、ネットで炎上する。私自身は性の違和感を抱えて生きる人を身近に知らない。その心の内を知らない分、私たちは関心が薄いかもしれない。LGBTについて考える時、無意識にLとは？Tは？と意味を探り整理しようとする。しかしその括りだけで彼女、彼らを理解できる訳はない。



●今月の館主

おおがねく よしみ 大兼久 由美 1960年沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデューサー、配給を行う。長編記録映画『ひめゆり』(2007)は6月の「沖縄慰霊の日」にちなみ東京のポレポレ東中野で毎年6月に上映を続けている。『森聞き』『千年の一滴』を含め自主上映を募集中。問合せ：プロダクション・エイシア(電話 / 042-497-6975)



ダムと民の五十年抗争 浅野詠子著、風媒社、2017年8月、1800円+税

奈良川上村は「吉野杉」に代表される林業の村である。かつて「東の八ッ場、西の大滝」と呼ばれた同村の大滝ダム建設をめぐる抗争の一部始終と、ダムが周辺地域に及ぼした水質悪化などの影響を、かつて新人記者としてこの地域を担当した元奈良新聞記者がルポしたものである。民主党政権の「脱ダム宣言」がとん挫しダム問題は人々の関心から遠ざかったが、本書からは、原発建設などと本質的に共通する、莫大な建設投資と地元へ巨額な補償金や補助金が流れる構造が読み取れる。その結果、互いに支えあった住民同士

の共同体的関係が分断され、昔は無かった「お金に執着する空気」が生まれ、住民は都市に移住し、過疎が著しく進んだという事実が残った。奈良盆地に農業用水を供給する吉野川分水事業に伴い建設された大迫ダム(1973年完成)に続き、62年11月、その下流に大滝ダムの建設計画が決まった。伊勢湾台風(59年9月)級の洪水を防ぐのが目的だが、3640億円の巨費を投じて完成したのは半世紀後の2013年だった。村役場のあある集落をダム湖に沈める計画に反対運動が起き、村民や研究者は地滑り発生の危険性を

指摘した。建設省(現国土交通省)はそれを無視して工事を進めたが、ダム本体の完成(02年)後の試験貯水により湖畔の白屋集落の地盤に亀裂が走った。集落の住民は3年間仮設住宅暮らしを強いられ、住戸移転と地滑り対策工事でさらに10年を要した。著者は、情報公開制度を使って官庁の資料を集め、住民や元住民だけでなく建設推進側の官庁職員にも取材しその葛藤を伝え、丹念に事実を積み重ねた。「官製の記録しか残らないでよいものか」という問題意識に基づいた著作である。 編集委員 神野 武美



Cafeここたの 東京都国立市富士見台1-7-1 富士見台団地1号棟1階104 電話 / 042-573-9433 営業時間 / 11:30~18:00 定休日 / 水曜日

「Cafeここたの」は、UR国立富士見台団地の商店街の一角にある。JR南武線谷保駅から徒歩5分、JR中央線国立駅から徒歩20分のエリアだ。店名の由来は「ここに来ると楽しい!!」。店内のテーブルやイス、柱などには長野県朝日村産のカラマツの木がふんだんに使われていて、気分が安らぐ空間になっている。



立つようになり、その状況を解決しようとして商店街が市に相談したところ、一橋大学を紹介された。そして大学のまちづくりの授業をきっかけに、商店街を盛り上げ

る団体が設立された。その団体が「Cafeここたの」を開設・運営する、NPO法人くにたち富士見台人間環境キーステーションである。カフェの運営は学生が行っている。樋口龍人さん(写真左)は16代目の店長で、もちろん現役の学生だ。学生だけでなく、大学の授業がある平日の昼間は地域住民のスタッフが運営を担っている。地域との交流の機会として開催しているのが「ここたのナイト」「グローバルカフェ」「認知症カフェ」。「ここたのナイト」は毎月第3土曜の19時から始まり、持ち時間5分で希望者が好きなことを発表できる場。詩の朗読、弾き語り、腹話術などが披露される。年3回の「グローバルカフェ」は、中高生と留学生の交流の場づくり。そして年6回の「認知症カフェ」は、認知症の介護者が集い、ストレスや悩みを話す場だ。専門職もいて相談できる。

樋口さんは「お客様と会話できることや、商店街の年配の店主と自由に意見交換できることが楽しい。今後は親子でも入りやすいお店づくりをしていきたい」と語る。 編集委員 山中大輔



社会的入院から地域へ精神障害のある人々のピアサポート活動 加藤真規子著、現代書館、2017年9月、2200円+税

日本は入院患者数が突出して多い(33.3万人 / 2016年)「精神病院大国」として知られる。その約4割は措置入院や医療保護入院など本人の意思に基づかない強制入院患者で、1年以上の長期入院者は20万人を超える。こうした状況は、「施設から地域へ」と精神障害者・精神病患者への対応を変えてきた世界の常識からことごとく逸脱し、極めて大きな人権侵害をばらむと著者・加藤真規子さんは指摘する。精神障害者・精神病患者の隔離収容を自明視し、彼らとの共生を拒んできた日本社会の差別的視線がその根にある。加藤さんが仲間たちと活動する「こらーるたいどう」は、

1998年から社会的入院患者の地域移行・地域定着支援活動を続ける。その特徴は、精神・知的・身体などの障害をもつ人々によるピアサポートの形式を取ることだろう。彼らは「わかちあい」と呼ばれるミーティングで、幻聴や幻覚など「同じ体験」について自分を主語にして語り合う。そして病院訪問を続け、地域で暮らすことが可能な入院者について、本人の意向を聞きながら地域移行の支援をしてきた。本書の最後には、元・ハンセン病患者や彼らを支援してきた弁護士らの語りも収録されている。加藤さんは彼らを、隔離収容の違憲性を社会に認めさせた「先輩」と呼ぶ。両者の協働は

2014年11月、国立ハンセン病療養所「沖繩愛楽園」で開催された「病があっても人として生きたいー『精神病』と『ハンセン病』を語る集いin沖繩」で実現する。語られたのは、地域でさまざまな人と共に生きるというあたり前の権利を奪われてきた彼らの現実であり、怒りだ。それは本書に通底する「精神障害がある人々の人間的復権」という加藤さんの願いと共鳴する。このあたり前の願いが踏みこたえられる現実とどのように向き合うべきか。それは不完全な人間の集まりであるこの世界に生きるわれわれひとりひとりが問われるべき問題である。 編集委員 工藤 宏司